

プロスポーツチームとファン間に発生する コンフリクトに関する研究 ～Jリーグのクラブを事例として～

スポーツビジネス研究領域
5011A032-4 甲賀 輝

第1章 研究背景

日本において近年、ファンによるスタジアムでの抗議が発生している。直近では、2012年12月1日の最終節のジュビロ磐田対ガンバ大阪の試合でファンによるチームへの抗議が起きている。

現状を考えてみると、ファンは時としてチームに対して抗議を行い、試合運営を妨げる存在であると言える。しかし、一方で、熱心に活動を行うファンは応援行動を先導し、他のファンをリードすることで、スタジアムの雰囲気盛り上げてくれる存在であることも事実である。先行研究では、応援を先導するファンがスタジアムの雰囲気盛り上げることで、他の観戦者の満足度に影響を与えていることなど、チームにとって、ファンが重要な存在であることが指摘されている。

これらのことを踏まえると、ファンとの間で起こる衝突(以下、コンフリクトと称す)が発生している理由や解消方法について研究することは大いに意義があることと言えよう。

第2章 コンフリクトの先行研究

日本においてプロスポーツチームとファンとのコンフリクトについて研究されたものを見つけることができなかった。そこで、コンフリクトの把握の方法、解消方法にはどういった方法があるのかを把握するためにコンフリクトの先行研究を見てみるものとする。

発生しているコンフリクトを理解するための方法として、荻原ら(2006)は5W-1H(When、Where、Who、What、Why、HOW)の視線で捉える方法を用いている。荻原ら(2006)は水資源のコンフリクトを捉える際にこの方法を用いているが、水資源以外のコンフリクトでも使われている方法であり、本研究で取り扱うプロスポーツチームとファンとの間のコンフリクトを深く理解する際にも用いることのできる方法といえよう。

コンフリクトの解消方法については Thomas(1976)が提唱したコンフリクト解消のための5つの行動に基づいて研究を行っているものが多く存在する。解消方

研究指導教員:木村 和彦 教授

法のための5つの行動とは、競争、協調、回避、適応、妥協の5つである。また、Robbins(2009)は解消のための行動を含んだコンフリクトの発生から対処した結果までのプロセスを提唱している。これらの先行研究の考えを用いてプロスポーツチームとファン間に発生するコンフリクトについて研究していくこととする。

第3章 研究目的と研究方法

本研究の目的はJリーグにおけるコンフリクトの現状を把握し、そして、クラブとサポーター間でコンフリクトが発生したクラブに対してケース・スタディを行うことで、Jリーグにおけるコンフリクトの基礎的な知見を得ることである。コンフリクトの基礎的な知見とは、コンフリクトの発生背景および争点、サポーターが起こした具体的な行動、コンフリクトの解消方法に関する事実と当事者間の意図などを意味している。

また、本研究では、「コンフリクトをプロスポーツチームとファンとの間で発生したもののみを取り扱い、プロスポーツチームとファンとの間で意見の相違が起きている状態」として定義する。具体的には、ファンがプロスポーツチームの成績、経営や運営、またはプロスポーツチームが決定したことに対して抗議のために、ファンが何らかの行動を行った事象のみを対象とする。そして、本研究ではJリーグを事例として研究することから、サッカーで一般的に呼称されている通り、今後は「チーム」のことを「クラブ」、「ファン」のことを「サポーター」と称することとする。本研究の研究枠組みを図1に示した。

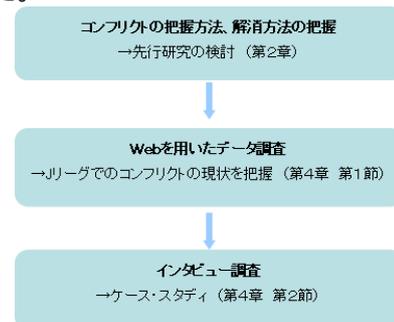


図1 研究枠組み

研究枠組みに記載している通り、本研究では調査を2つ実施した。1つは、Jリーグ全体のコンフリクトを把握するためにWebを用いたデータ調査を行った。もう1つは、ケース・スタディを行うためにインタビュー調査を行った。各調査の概要は以下の通りである。インターネット調査では、朝日新聞社、毎日新聞社、読売新聞社の各社が提供している過去の新聞記事を検索できるサイトを利用し調査を行った。

検索した期間は2007年度から2011年度の過去5年分とした。この5年間にJ1もしくはJ2に所属していたクラブのみを対象としたため、対象となったクラブは31クラブである。検索を行う際に用いた検索ワードは、クラブを示す単語、サポーターを示す単語、コンフリクトを示す単語の3つの単語の組み合わせで構成した。クラブを示す単語には、そのクラブの名称の都市名、もしくはチーム名を入れた。サポーターを示す単語には「サポーター」、もしくは「ファン」という単語を入れた。コンフリクトを示す単語の選定はスポーツビジネスを選考する大学院生5名と筆者で議論し、決定した。

また、Webを用いたデータ調査で得た結果を元に3つのJクラブに対して半構造化インタビュー調査を実施した。また、クラブの許可が取れた場合のみ、クラブのサポーターに対してもインタビュー調査を実施した。調査を実施したクラブは、コンフリクトが発生した経験があり、Webを用いたデータ調査の結果で特徴があったクラブである。インタビュー調査で用いた質問項目は第2章で述べた荻原らがコンフリクトを理解するために用いた5W-1Hの視点、および、Robbins(2009)が提唱しているコンフリクトのプロセスを元に構成した。

インタビュー調査結果の分析として、Webを用いたデータ調査で得た新聞記事、および、インタビュー調査で得た結果をサポーターの視点、クラブ側の視点から時系列にまとめ、それぞれの行動、及び対応を分析することでケース・スタディを行った。また、コンフリクトの対応策がどの様なものであったかをThomas(1976)が提示したコンフリクトの解消のための行動と照らし合わせて分析を行った。

第4章 結果および考察

第1節 インターネット調査

全31クラブ中、18クラブが過去5年間の間に何らか

のコンフリクトが発生していた。コンフリクトが多いクラブもあれば、一切発生していないクラブもあり、コンフリクトの発生しているクラブと発生していないクラブの2極化していることが伺える。サポーターが起こした行動で最も多い行動は試合後のスタジアム居残りによる抗議であった。コンフリクトの発生背景は大きく分けると、成績不振や敗戦に関する事、選手の解雇・放出に関する事、そして、クラブの対応や決定事項の3つであった。コンフリクトが発生した年の前後の平均入場者数を見てみると、コンフリクトが発生した次の年に平均入場者数が増加しているケースもあり、コンフリクトの発生が入場者数のマイナス要因にはならないケースも見られるということが明らかになった。

第2節 ケース・スタディ

ケース・スタディの結果から、コンフリクトが発生することで、サポーターのクラブに対する信頼感を高めたり、サポーターとクラブとの新たなコミュニケーションの方法が構築されたことが明らかになった。また、3クラブ中、2クラブでは、感情的な状況では対応せず、冷静な場で改めて話し合いをするというThomas(1976)が提示したコンフリクトの解消のための行動にあてはまらない独特な行動を行っていた。

第5章 結論

コンフリクトを適切に解消すれば、サポーターのクラブへの信頼感が高まることやクラブとサポーターとのコミュニケーションがよく取れるようになったことにより、クラブへの愛着が高まる可能性があることが指摘できる。Webを用いたデータ調査の結果からクラブの成績不振がコンフリクトの発生背景として多いことが確認でき、また、インタビュー調査でもコンフリクトの発生した主な理由にクラブの成績不振があげられた。このことから、どのクラブにおいても、コンフリクトが発生する可能性があることが指摘できる。つまり、クラブの成績が低迷する可能性がある以上、コンフリクトの発生経験の有無に関わらず、どのクラブもコンフリクト解消のための方法を事前に検討しておく必要がある。しかしながら、クラブ単体で発生したコンフリクトに対しての適切な解消方法を導き出すことは非常に難しい。コンフリクトの適切な解消を目指す上で今後はJリーグ全体での取り組みが必要不可欠であろう。